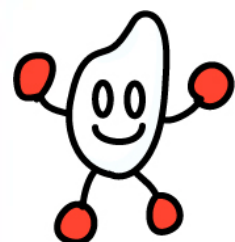


# ひでお行動

Vol. 33

## 9月20日

朝、池田後援会長から電話がはいる。「稲刈が昨日の雨で出来ないのだからJA組合長も呼んで午後から農政懇談会できないか。」すぐ了解し専業農家など、手分けして声をかける。しかし、急な案内で稲刈出来なくとも忙しく出席してくれたのは10人、来年度の概算要求額をはじめ戸別補償制度、担い手問題などについて説明し、意見交換。



米価下落で概算払い1表3300円落ち、地元庄内町全体で約10億減収、経済に与える影響は図りきれない影響がある。11月になれば経

費、借入金、基盤整備費など支払わなければならない、戸別補償金額の支払いがないと借金が膨らむだけであり、11月までに支払うよう動いてもらいたいと強く要望される。町議会、県議会と連携しながら要請行動を検討、明日8時からの会議があるため最終便で上京する。

## 9月21日

菅改造内閣人事は政務官任命し、終えた。貿易自由化を巡って大畠経済産業大臣のEPA締

結積極推進発言、鹿野農林水産大臣の守りながらも攻めの転換発言、片山総務大臣の公務員給与基準見直し発言等、重要政策課題について大臣としての考え方が出されている。臨時国会開会に向けて準備を急がなければならない。今日も林業における概算要求額について担当官に説明を求めながら昼過ぎまで意見交換。

今日は朝8時から労働組合と社民党との懇談会である。社民党労働担当のS氏は通勤時間の関係で昨日からホテルに泊まり資料準備してもらっている。12単産から委員長、書記長など3役から出席頂き、参議院選挙総括、統一地方選、臨時国会に向けての構え方など当面の取組みについて意見交換。時間が1時間と限られている為、6単産から意見要望出される。特に「10テーマ33項目の政策合意の具体的進め方、公共サービスの捉え方」に意見が集中する。各労組も大会を終え、秋闘方針を確立したばかりで、突っ込んだ意見交換はこれからで、労働担当として、回を重ねながら進め社民党労働政策を補完して頂きながら、国会内と労組の闘いを結合して進めていかなければならない。

夕方6時半から3回目の「ワンコイン懇談会」である。今回は前回ベトナム他3カ国の農業実態調査で同行した課長達と事務所の懇談会である。大臣、政務官交代し期待もあるが農政について論議が弾む。「6次産業」について次回集中的に懇談することを約す。場所を移動し「カラオケ大会」秘書も上手であるが、課長は

じめ職員の方々も上手である。最後は「また会う日まで」合唱しフィナーレ。

## 9月22日

10月1日、臨時国会開会と決まり、予定行動大幅に食い違い日程調整に時間かかる。朝9時半から社民党常任幹事会、「党再建」について自分含めて各委員から文章で意見出される。意見交換できると思っていたが、臨時国会日程対応などで、論議は24日に持ち越される。社民党のこれからの道筋について激論が予想されるが、時間の関係で第一次草案をまとめるのに議論の時間補償できるのか、心配になる。

2時から厳しい参議院選挙を勇敢に闘った方々との懇談会。全国各地で闘った若い人から議員経験者の方々と幅広いが、選挙戦での総括をどう統一地方選に活かしていくのが議論の焦点である。しかし、候補者として初陣を飾れなかった悔しさなど。もっと惜敗した悔しさが前面に出るものと思っていたが、……来春の統一地方選は社民党にとって最後の存在価値が問われる闘いである事を確認する。会議終了後、懇談会、東北から青森、岩手、宮城と厳しい選挙区で闘った方々全員出席。2次会にも付き合い最終新幹線で山形まで、11時半過ぎになるがAから迎に来てもらう。自宅に着いたのは深夜2時前になる。



## 9月23日

尖閣諸島の領有は中国、台湾は自国領土と主張している。日本は明確に領有宣言し沖縄県石垣市に所属する。中国は「明代以降中国の領土、日本は日清戦争のどさくさ紛れで行為」と尖閣諸島は中国のものと主張し領有権は平行線のままである。漁船衝突事件以降日中関係の緊張が日を迫るごとに高まっている。

地元山形県は友好県省を結んでいる黒竜江省の省都「ハルピン市」に来年4月県事務所開設予定しているし、間近に迫った北京で開催される日中友好協会創立60周年記念式典に「県民のつばさ」派遣事業予定している。そして、10月13日から1週間「山形県食品フェア」をハルピン市で開催予定しているから関係者の気持ちは落ち着かない。漁船船長の身柄拘束のままであるし、領有権絡んでいるから簡単に解決できるものではないが、菅総理は国連総会に昨日出発しているし中国温家宝首相も出席しているからトップ会談で解決の糸口を見出すべきであるにも関わらず対談すら設定できない。もっと真剣に立ち向かって欲しいと思う。10月1日からの臨時国会の大きな焦点になるし、社民党として追求準備を急ぐ。

今日は自宅で迎えるが、朝から、「夫が痴呆症で入院しているが病院から退院許可がでる。しかし自宅で介護できないし施設紹介……」などの相談が入る。また県議時代からお世話になっているH氏から「登記もされている畑が相



談まもらないうちに私有道路地にされてしまい、市建設課や議会議員に相談しているが進まない。」との相談入り、その対応と自宅で事務整理。

## 9月24日

11時から全農本部B部長と「戸別所得補償制度」について意見交換の為2便で上京する。農家は11月経費等支払い月であるが米価の大幅下落で奨励金など早期支払いを求めるが、申請業務等で年を越す現状である。各県段階で、つなぎ資金等の融資について対応策を検討しているが、各県バラバラである。社民党として早期支払いを求めていくが全農本部として各県の状況を調べ、再度意見交換する事とする。

社民党再建プロジェクト第2回検討委員会開催される。これまでに各委員から文章で意見出される。検討委員会、常任委員会での意見を取り入れられた再建案にはなっているが、委員全体でまとまる案にはなっていない。熱心な討論続く。常任委員会でプロジェクト案を再度協議していく。  
執務室に戻ると漁船衝突事件で那覇地検は船長を処分保留のまま釈放するとFAXで連絡入るが、地元経済界で11月にベトナムに訪問予定である先輩のS氏とH氏との打ち合わせ日程入っている為、その後細部について情報収集する。

地元経済界でベトナムに対する関心は高い。東アジア研究会を組織してこれまで2回ベトナムに関して勉強会開催、そして今回訪問することになったが、私の日程調整難しい。宮崎県での護憲集会、日ソ協会ウラジオストックからのお客さんの受け入れと重なっている。ベトナムに関する資料等まとめると共に、大使官を通じて現地商工会議所との懇談会できるよう努力する。今日は散髪してもらう為に久しぶりに八王子の姉宅に泊まる・

## 9月25日

八王子から10時で出発したが、吉祥寺駅

で人身事故、約1時間送れ、12時から始まる紫紺同窓会東京支部総会

(酒田商業高校同窓会)に遅れてしまう。昨年始めて出席させて頂いたが、参加者は昨年より多い。校長はじめ恩師など酒田からも参加あり、1年ぶりで逢う人達がほとんどである。酒田商業高校から国会議員は私が初めてであ



り写真撮影などお願いされお陰で名刺は60枚無くなる。同窓生は税務署、銀行、公認会計士が多いし会社経営者も多い。尖閣諸島問題や国政に対する質問、地方の再生に対する質問もするどい。同期生も参加しておりほとんどの方々がホテル内の2次会場で更に盛り上がる。

帰り最終便であるが、今日のチケットでなく別のチケットである。再発行していただくが、余裕もって受付したから間に合ったが……今日は朝から帰りまでハプニング。

尖閣諸島での衝突事件で船長の処分保留のまま釈放したことに、各社大きく取り上げる。福島党首は「那覇地検の処分を尊重するしかない。」と私的発言しているが、与野党とそれぞれコメントを出しているが公式発言ではないようだ。しかし、今釈放するのは中国の圧力に屈したと言わざるを得ない。これからの日中関係を思えば、釈放するのであればなぜもっと早くできなかったのかと思うのは私だけではないと思うが、……尖閣諸島は明治時代から明確に日本の領土とされてきた歴史がある。

明治28年(1895年)明治政府は現地調査を行い中国が支配していないことを確認し沖縄県に編入する閣議決定している。終戦後は1972年沖縄返還まで米国の施政下におかれたが中国からの異論はなかった。しかし、尖閣諸島周辺の大陸棚に石油資源が埋蔵されている事がはっきりしてから、中国と台湾が突然領有権を主張始めたのである。中国は1992年、領海と明記し台湾は1999年に領海の基準線を定めた。その後、不法上陸など事件が起

きてきている。

28日参議院外交防衛委員会、1日からの臨時国会で激しい議論が展開されるのは必死である。

## 9月26日

元山形県議会議員、田辺省二氏の「旭日双光章受章祝賀会」呼びかけ人代表として挨拶する。鶴岡市長、県議会議員は

じめ240名ご臨席賜り盛大に開催された。鶴岡市職員

から、市議会議員、県議会議員を歴任し労働運動、平和運動を先頭にたって私達を引っ張って頂いた先輩である。昭和57年日本初めて自閉症児者の通所作業所「いなほ作業所」設立、平成4年医療法人「みつわ会」設立老人保健施設「のぞみの園」設立、クリニック、ケアハウス、知的障害者厚生施設設立に奔走し「福祉の田辺」と多くの人達に慕われてきた先輩である。地域を想い、志は高く、熱い先輩である。雇用問題が深刻になっている今、田辺氏が関わってきた施設で働く人たちは450人を越えている。「きれいごとや、意見を言うことは易しい、しかし、具現化、形にしていくことは難しい。」そこに挑戦し続けてきた田辺先輩に学ぶものは多い。

